

令和4年度 中央区立銀座中学校	外部評価報告書
外部評価委員：堀内 一男 倉澤 豊明 中村 圭一 三浦 紀夫 竹田 裕子 第三者評価委員：株本 光子	
評価時期 令和5年3月	
1 重点目標の評価 重点目標1 「相手の話を聴き、心と頭でよく考え、自分の意見や考えが相手に伝わる表現力をもつ」 生徒が将来この力を発揮して自立し、社会の問題を解決できる人となることを願ったものである。学校は、4項目のアンケート結果80%以上を目指した。結果、「学習内容の確実な定着」「タブレット端末を有効活用し、基礎基本の定着及び主体的・対話的で深い学びの実現」では、教員、生徒、保護者の80%以上が肯定的な回答をした。特に生徒の92%が自分を肯定的に評価した。 これとは別に、生徒による「生徒授業評価アンケート」を3年間実施し、経年変化を捉えた。「先生の授業力」「自分の授業態度」を問うたものである。「先生の授業力」「生徒の授業態度」ともすべて今年度が最も高く、89%～97%の肯定的評価である。生徒自身が自らの学ぶ姿を正し、教師が自らの指導の改善を続けた結果である。銀座中学校の大きな誇りである。 一方「わからない」という回答は、大切な学校へのメッセージである。保護者のアンケートから、「知りたい」との願いが伝わる文面が散見された。新しい教育の方向とそこで求める生徒と教師の姿は、今までの教育と大きく舵を切っている。銀座中学校では、生徒が自立して人生を切り開いていけるように中央区の研究奨励校をうけ、挑戦し続けている。生徒の教育の充実は、学校、地域、保護者の協働により実現する。目指す教育をわかりやすく、言葉や動画、写真、参観などの様々な機会を活用して丁寧に伝えていただきたい。 重点目標2 「豊かな人間性、多様性を受容する共生の心をもつ」 多様な人と共生できるように願うこの取組も4つの視点で80%以上の肯定的評価を目指した。「いじめ・不登校・問題行動等の未然防止や早期発見に努めているか」に生徒32%、教員13%がそうではないと回答した。この結果に対し、学校では、「組織内の情報共有が不十分であった。」「生徒に対して、どの様に取り組むかの方策を明確に提示すべきである。」「保護者に対してお知らせで伝えきれていない。発信力をつける。」と自己評価し、次年度への改善の意欲を見せている。 保護者、地域、学校が深くこのことを理解し合い、生徒の育成にそれぞれの立場で参加するために、学校で決めた次年度の「分かるように伝え方を工夫する」取組に期待する。 重点目標3 「強い意志と身体、基本的生活習慣や社会性をもつ」 この項目でも、学校は、80%以上の肯定的評価を目指して取り組んだ。結果は、「生活習慣を身に付ける」「体験活動に主体的に取り組む」「体力向上が図られた」は、生徒、教員、保護者とも80%以上の肯定的であった。外部評価委員会で次のような話が出た。 現在は、子どもたちから主体的に挨拶をするようになった。初めは、声を出して挨拶できないなど生徒によって状況が異なっていた。そこで、「まず挨拶をする」、「目を見て頭を下げる」など、それぞれの教員が、個々の状況に応じた指導した。全体への指導も行った。生徒に応じた、また、場に応じた指導がよかった。 一律の指導ではなく、個に応じた指導は、教科だけにとどまらず、生徒指導・進路指導にも生かすことを教師は、身に付けてきている。教師の大きな成長も確認できた。 ○「家庭や地域との連携」 銀座中学校の研究は、中央区の先駆的な研究である。教師の願いを教師とともに、生徒も保護者も理解していただきたい。それが、生徒の未来をつくることにつながる。「地域も大きな期待と応援をしている。」と外部評価委員からのメッセージがあった。 2 今後の改善に向けた意見 ○ 働き方改革の視点からも、タブレット端末などの活用を試み、先生たちがゆとりのある時間を少しでも持てるように工夫してほしい。創造性はゆとりの中で生み出されるためである。 3 その他 なし	

令和4年度 中央区立銀座中学校	外部評価報告書
外部評価委員：堀内一男 倉澤豊明 中村圭一 三浦紀夫 竹田裕子 報告書作成者：峯川一義	
評価期 令和5年2月	
1 重点目標の評価 重点目標1「相手の話を聴き、心と頭でよく考え、自分の意見や考えが相手に伝わる表現力をもつ」 ○4つの評価項目のすべてで「よくできている」の生徒の評価が教員や保護者の評価に比べ際立って高く(54～60%)、生徒の肯定的な評価についても極めて高い(88～95%)。教員の授業改善の努力、生徒の学習に向かう意志や意欲が見て取れる。 ○一方、保護者の学習面に対する否定的な評価は少ないものの、「分からない」という評価は4つの項目すべてで1割を超えており(11～16%)、コロナ禍での学校参観の機会の減少という要因は否定できないが、次年度に向けて対応を工夫する必要がある。 ○教員の否定的な評価は、生徒や保護者と比較してすべての評価項目で一番高い(8～17%)。「少人数、習熟度別指導」(17%)については、個々の教員が当事者意識をもって「個に応じた指導の充実」という観点で成果を評価することが大切である。 ○タブレット端末の活用については、教員の個人差が大きくなりがちであるが、どの教員でも活用できる基準を明らかにして今後取り組んでいくとよいのではないかと。 重点目標2「豊かな人間性、多様性を受容する共生の心をもつ」 ○いじめ・不登校・問題行動等の未然防止について、肯定的な評価は教員が85%、保護者は77%であり、生徒の否定的な評価は32%である。「学校(教員)がもっと手を差し伸べてほしい」という生徒の声と受け止め、個々の生徒の状況に寄り添った指導を一層充実することを期待する。 ○特別支援学級と通常級の交流や共同学習は円滑に進んでいることが、生徒や保護者の強い肯定的な評価からも見て取れる。 ○道徳科の授業の成果は、93%生徒が肯定的な評価をしており実績を挙げている。一方、分からないと答えた保護者が21%おり、豊かな人間性を育成する礎となる道徳教育について学校から保護者への働きかけを一層強めていく必要がある。 ○「主体的な活動への関わりによって奉仕の精神や帰属意識の高まり」についても、生徒の92%が肯定的に評価しており、学校生活へ生徒が意欲的に取り組み、大きな成果を挙げている様子が見える。 重点目標3「強い意志と身体、基本的な生活習慣や社会性をもつ」 ○基本的な生活習慣については、生徒94%、保護者90%、教員84%が肯定的な評価をしている。コロナ禍での危機意識の影響も少なからず考えられるが、よい生活習慣が身に付いているという自負をもって学校生活を過ごしている様子が見える。 ○「行事等への主体的な取組」(質問項目2)及び「体力の向上」(質問項目4)はいずれも教員の肯定的な評価は100%である。生徒も両方の項目に92%、保護者は約90%の肯定的な評価をしている。体力テスト等の結果とも照らし合わせ成果と課題を明らかにすることが大切である。 ○進路学習の成果を問う質問(質問項目3)でも、教員、生徒ともに肯定的な評価が90%以上である。一方、保護者は「分からない」が15%おり、中学校三年間で系統的に行うコロナ後のキャリア教育の内容を周知する必要がある。 2 今後の改善に向けた意見 ○3つの重点目標の評価項目の全て(12項目)で「よく当てはまる」の教員の評価が一番低い。最上位の評価にしなかった課題や問題は何かを明らかにして新年度を迎えてほしい。 3 その他 ○校長の行った授業評価の3年間の経年変化を見ても、素晴らしい成果を挙げている。学校運営の体制や教員と生徒の良好な関係が推測でき、充実した教育活動が行われていると考える。	